



村道座り



川崎ゆきお

田畑がまだ少し残っている町だ。大きなマンションがあり、その壁面の段差に高岡が座っていた。過去形だ。今はその姿はない。亡くなったわけではない。まだ生きている。かなり高齢だが、寝たきりではない。

その高岡が、久しぶりに姿を現した。サングラスをかけ、杖をついている。目が悪く、足も悪い。だが、歩けないわけでもなく見えないわけでもない。

その視界に、昔なじみの大崎が映った。

「久しぶりですなあ高岡さん。元気でしたか」

「ああ、何とか現状維持ですよ大崎さん。あなたも丈夫そうで」

「いえいえ、駄目ですよ。めっきり外に出ることもなくなりました。今日は電池が切れたので、百円ショップへ買いに行くところです」

「百均の電池安いですが、すぐになくなりますよ。だから、値段と寿命が比例している」

「ああ、そうなんだ。それより、数ヶ月前からかなあ、高岡さんが、ここで座っていないので、何かあったのかと思いましたよ」

「ああ、そのことですか。体調とは関係ないです」

「じゃ、どうして」

「数ヶ月といっても半年前です。だから、かなり前の話なんですけどね。注意されたんです。警告かな」

「誰が？」

「緑の腕章をつけた人たちですよ」

「知らない人ですか」

「ああ、知らない」

「何の警告？」

「いや、警告じゃないんだけどね。まあ、それに近い」

「ほう、なんと言われたのですかな」

「まあ、目障りだということでしょうか」

「それは失礼な」

「それより、子供が怖がるのでと」

「はあ？」

「下校中の児童が怖がるので、ここに座らないほうがいいって」

「だって、高岡さん、あなた何十年も、ここに座っているじゃないですか」

「そんなに長くいませんよ。ここ十年ほどですよ」

「じゃ、その緑の腕章の人たちは、保護者でしょう」

「だと思えます」

「高岡さんのこと、知らないんでしょうねえ」

「いやいや、そんな旧時代の」

「この一帯の名主さんなんだから。もう四百年以上……」

「昔のことですよ。屋敷も取り壊し、マンションに建て替えたしね。農地は全部売り払いまし

たよ」

「名士ですよ。この辺りの。それを不審者扱いにするとは、何事でしょう」

「いやいや、そんなことはどうでもいいんだけど、我が家の前で腰を下ろしちゃいけない時代になっておるんですよ」

「じゃ、こうしましょう。そこの家庭菜園。あんたのでしょ。貸さないで、東屋を造って椅子を置けばいい。それなら私有地だ。そこで、座って文句を言われる筋合いはない」

「そこまでして座りたいわけじゃない。ただ、昔の村道で、行き交う人を見たいだけなんだよ」

「そういえば、この辺りに石がありましたねえ。そこにいつも誰か座っていた。子供の頃、そこを通ると、声をかけられましたよ。嫌だったけど」

「そうなんだ。やっと、自分が座れる番になったと思ったんだがね。違うようだ」

「やっぱり、菜園に東屋に椅子ですよ」

「考えておくよ」

その後、菜園に東屋は建たなかった。高岡は私有地ではなく、村道に座りたかったのだ。

了